

井  
尻  
B  
遺  
跡  
20

い じり い せき  
井 尻 B 遺 跡 20

— 井尻B遺跡第27次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1136集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一三六集

二〇二二

福岡市教育委員会

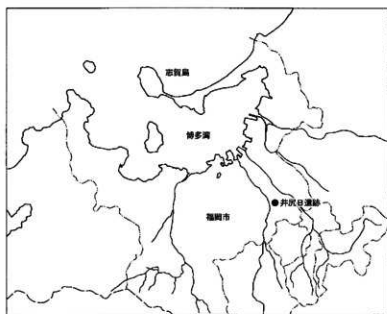
2012

福岡市教育委員会

# い じり                      い    せき 井尻B遺跡20

— 井尻B遺跡第27次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1136集



調査番号 0641  
遺跡略号 IGB-27

2012

福岡市教育委員会



# 序

二千年の昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、二十世紀のアジアに開かれた都市として、更なる発展を目指しやかに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、南区井尻1丁目736-3、763-5で実施した共同住宅の建設に先立って実施した井尻B遺跡第27次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、甕棺墓や土壙墓からなる弥生時代の墓地と掘立柱建物跡などの集落跡が発見されました。井尻丘陵の北端に立地する弥生時代の墳墓群と集落跡の発見は、井尻丘陵の南に広がる弥生時代の墳墓群と集落域の消長を知る上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井 龍彦

## れいげん

1. 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅の建設に先立って、平成18（2006）年度に、福岡市南区井尻1丁目736-3、763-5で緊急発掘調査した井尻B遺跡第27次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位は、すべて磁北方位である。
3. 本書に掲載した遺構と遺物の実測および製図は、小林義彦が作成した。
4. 本書に掲載した遺構と遺物の写真は、小林が撮影した。
5. 本書の執筆・編集は、小林が行った。
6. 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：0641	遺跡略号：IGB-27	分布地図番号：25-0090
調査地籍：福岡市南区井尻1丁目736-3、763-5		
工事面積：447㎡	調査対象面積：80㎡	調査実施面積：133㎡
調査期間：2006年8月21日～9月2日		

# 本文目次

## 序

I. はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	3
II. 調査の記録	9
1. 調査の概要	9
2. 甕棺墓	9
3. 土墳墓	19
4. 掘立柱建物跡	22
5. その他の遺構と包含層の遺物	24
III. 小 結	24

# 挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2 井尻B遺跡位置図 (1/5,000)	4
Fig. 3 井尻B遺跡周辺旧地形図 (1/20,000)	5
Fig. 4 井尻B遺跡第27次調査区位置図 (1/2,000)	7
Fig. 5 井尻B遺跡第27次調査区周辺現況図 (1/500)	8
Fig. 6 第27次調査区遺構配置図 (1/100)	9
Fig. 7 4号甕棺墓実測図 (1/30)	10
Fig. 8 4号甕棺実測図 (1/12)	11
Fig. 9 3・5・6・7・10号甕棺墓実測図 (1/30)	11
Fig. 10 3・5・6・7・10号甕棺実測図 (1/6)	15
Fig. 11 11号甕棺墓実測図 (1/30)	16
Fig. 12 11号甕棺実測図 (1/12)	17
Fig. 13 1号土墳墓実測図 (1/30)	18
Fig. 14 2号土墳墓実測図 (1/30)	18
Fig. 15 2号土墳墓出土遺物実測図 (1/2)	19
Fig. 16 8・9号土墳墓実測図 (1/30)	19
Fig. 17 12号土墳墓実測図 (1/30)	21
Fig. 18 13・14・23・24号建物跡実測図 (1/80)	22
Fig. 19 ビット・遺物包含層出土の遺物実測図 (1/4・1/2)	24
Fig. 20 井尻B遺跡内の弥生時代遺構分布図 (1/5,000)	26

## 写真目次

ph. 1	調査区全景（西から）	10
ph. 2	4号甕棺墓（西から）	10
ph. 3	4号甕棺（縮尺不同）	11
ph. 4	調査区中央部甕棺墓・土壇墓群（西から）	12
ph. 5	3号甕棺墓（西から）	12
ph. 6	5号甕棺墓（南から）	13
ph. 7	6号甕棺墓（東から）	13
ph. 8	7号甕棺墓（東から）	14
ph. 9	10号甕棺墓（北から）	14
ph. 10	3・5・6・7・10号甕棺（縮尺不同）	16
ph. 11	11号甕棺墓（南から）	17
ph. 12	11号甕棺墓挿入状況（北から）	17
ph. 13	11号甕棺（縮尺不同）	17
ph. 14	1号土壇墓（東から）	18
ph. 15	2号土壇墓（北から）	19
ph. 16	8・9号土壇墓、10号甕棺墓（南から）	20
ph. 17	8号土壇墓（南から）	20
ph. 18	9号土壇墓（西から）	20
ph. 19	12号土壇墓（北から）	21
ph. 20	13・23号建物跡（西から）	23
ph. 21	14号建物跡（東から）	23
ph. 22	24号建物跡（東から）	23

## 表目次

Tab. 1	井尻B遺跡調査一覧表	6
Tab. 2	甕棺墓一覧表	18
Tab. 3	土壇墓一覧表	21
Tab. 4	挿立柱建物跡一覧表	24

# I. はじめに

## 1. 発掘調査にいたるまで

井尻B遺跡は、福岡平野を北流する那珂川に沿って春日市の須玖岡本から井尻・五十川・那珂・比恵へとつづく低丘陵上に立地している。この那珂川以南の地は、昭和30年代まで農業を基盤とする村々が点在するのどかな田園地帯であった。しかし、昭和40年代以降の高度経済成長期に、郊外の市街化が急速に進み、往年の田園風景は次第に失われつつある。

井尻は、春日市の岡本から那珂・比恵へと続く低丘陵の中ほどに位置する。この地は、北へ行けば竹下、南は春日、東は板付～月隈、西へは日佐～老司への分岐点にあたり、西鉄大牟田線の井尻駅周辺は、交通の利便性に長じた地として早くから本村を中心に住宅域が広がっていた。そのため比較的狭い道路が村中を網の目のように延びている。しかし、都市計画道路御供所井尻1号線の整備に伴って周辺の様相は一変し、低中層の共同住宅建設が増加している。

第27次調査区周辺では都市計画道路御供所井尻1号線の新設に伴って発掘調査が実施され、小型仿製鏡や銅鏡、銅戈、銅矛などの鋳型やそれらの鋳型で制作された青銅製品や埴埴などが出土しており、青銅器やガラス製品を製作する集落域が広がっていることが確認されている。

平成18(2006)年6月、井尻1丁目736-3、763-5地内における共同住宅の建設が計画され、遺跡の存否確認の申請が埋蔵文化財第1課に提出された。申請地には、弥生時代の遺構が広がっている可能性が予測され、同年7月6日に試掘調査を実施して遺構の存否を確認した。その結果、弥生時代と思われる遺構が検出された。これを受けて現状保存のための協議を行ったが、設計変更が不可能なため建築物によって破壊される範囲を発掘調査して記録保存に努め、駐車場は現状保存を図ることとなった。

発掘調査は、平成18年8月21日に開始し、弥生時代中期後半～後期の甕棺墓や土墳墓などの墳墓群を検出して9月2日に無事終了した。これらの成果は、地権者のご理解と指導、助言を頂いた先輩諸氏および炎天下で発掘作業に従事した方々の労苦に負うところが大きい。ここに記して感謝の意を表します。なお、発掘調査は、事業の性格上国庫補助事業として実施した。

## 2. 発掘調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会文化財部

調査総括 埋蔵文化財第1課長 濱石哲也

埋蔵文化財第2課長 田中寿夫

埋蔵文化財第2課調査1係長 米倉秀紀

調査庶務 埋蔵文化財第1課管理係 古賀とも子

調査担当 埋蔵文化財第2課 小林義彦

調査・整理作業

石橋陽子 今村ひろ子 大瀬良清子 知花繁代 塚本よし子 土斐崎孝子 西田文子  
馬場イツ子 播磨博子 森田裕子 山口慶子

なお、発掘調査にあたっては、蔵富士寛(埋蔵文化財第2課)氏の協力を得た。



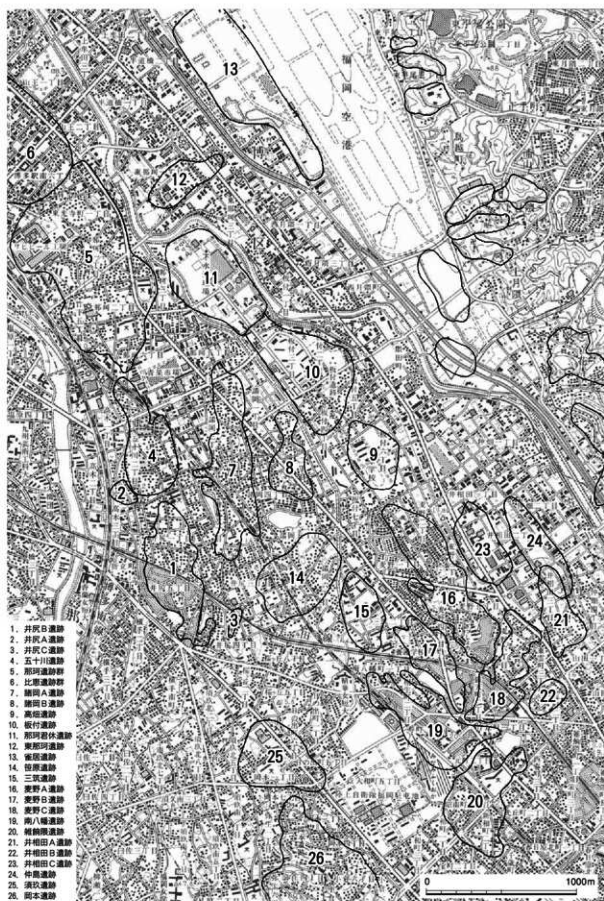


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

### 3. 立地と歴史的環境 (Fig. 1・2)

井尻B遺跡群のある福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれ、北は玄界灘にむかって開口する博多湾に面した沖積平野である。

この福岡平野の中央部を北流して博多湾に注ぐ那珂川と御笠川の間には、標高11～15mの低丘陵が北の博多湾にむかって断続的に長く延びている。この春日丘陵と総称される洪積丘陵は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層に阿蘇山の噴火によるAso-4火砕流によって形成された八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積する火砕流台地で、台地内には小さな開折谷が幾筋も彎入して複雑な地形をなしている。この春日丘陵は、奴国王の王墓地と推定される岡本遺跡のある須玖岡本から井尻、五十川を経て那珂、比恵へと続き博多湾の海岸砂丘に至る。これらの丘陵上には、後期旧石器時代から中世にかけての遺跡が連続し複合的に重なって展開している。殊に、弥生時代から古代にかけては濃密な分布状況を示している。

井尻B遺跡は、春日丘陵が標高を下げながら那珂・比恵丘陵へと続く標高は11～15mの低平な台地の鞍部に立地している。この井尻B遺跡については、古くには江戸時代の儒学者青柳種信の著書「筑前國續風土記拾遺」の那珂郡井尻村の条に、「熊野権現の銅矛鑄型」や「大塚」、「古瓦多く出、昔大寺など有りし」などの記述がある。また、大正13年～昭和2年には九州帝国大学の中山平次郎博士が甕棺墓や竪穴のほか瓦の包含層について報告され、寺院基壇の整地層の可能性を指摘され、早くから考古学界には知られていた。この井尻B遺跡における発掘調査は、昭和56(1981)年の第1次調査に始まり、以来36地点で調査が実施されて、丘陵上における遺構の拡がりや消長が次第に明らかになりつつある。

ここで井尻B遺跡を概観すると、その初現は後期旧石器時代に始まり、第2次調査や12次調査で細石刃やナイフ形石器、石核が出土している。その後、縄文時代は長きに亘って人跡は途絶える。

弥生時代になると、台地の北西端で弥生時代草創期の夜臼式や板付Ⅱ式の土器が散見される。中期には貯蔵穴群や甕棺墓などが拡がっているが、密度的には散漫な分布を示す。後出する遺構からこの期の遺物が大量に出土することを勘案すると多くの遺構は削平されて消失した可能性も考えられる。須玖岡本遺跡を頂点とする奴国全盛の後期になると、竪穴住居や掘立柱建物を中心とする集落遺構が丘陵の全域に濃密な拡がり、一大拠点集落としての様相を示す。中でも丘陵の中央尾根線上に位置する第6次調査や11次調査、17次調査では、小型仿製鏡や銅鏃、銅矛、ガラス勾玉などの鑄型や小型仿製鏡、小銅鐸、銅鏃などの青銅製品と埴塼や青銅滴付着土器など青銅器やガラス製品を製作に不可欠な遺物が出土している。このことは井尻丘陵に青銅器やガラス製品などを生産する工房的集落があったことを示唆するものである。一方、井尻B遺跡から南東へ1kmの岡本丘陵には、奴国王墓を擁する須玖岡本遺跡があり、奴国の中心地として広く知られている。この須玖岡本遺跡には、奴国王墓や甕棺墓群を主体とする墳丘墓が点在し、その前面に拡がる野原の沖積地には、青銅器の工房跡である永田遺跡や坂本遺跡、黒田遺跡のほかガラス製品工房跡である五反田遺跡があるほか、南西方にはガラス勾玉鑄型や小型仿製鏡が出土した弥永原遺跡があり、その東には後漢鏡を副葬した日佐遺跡が隣接している。また、井尻B遺跡から北へ続く丘陵上の那珂遺跡や比恵遺跡でも銅製の鑄型や取瓶や中子などの鑄造用具が出土している。これらのことから須玖岡本遺跡を中心として北へ延びる井尻～五十川～那珂～比恵へと続く丘陵上には、青銅器やガラス製品を鑄造する有力な拠点の集落が丘陵ごとに展開していたものと推考される。このように青銅器やガラス製品を鑄造する奴国の有力な拠点の集落として丘陵上の各所に展開した集落群も古墳時代初めを境として稀薄になる。この期の墓域としては、土壌墓や木棺墓、石蓋土壌墓などが第2次調査や27・34次調査で検出されている。また、こ

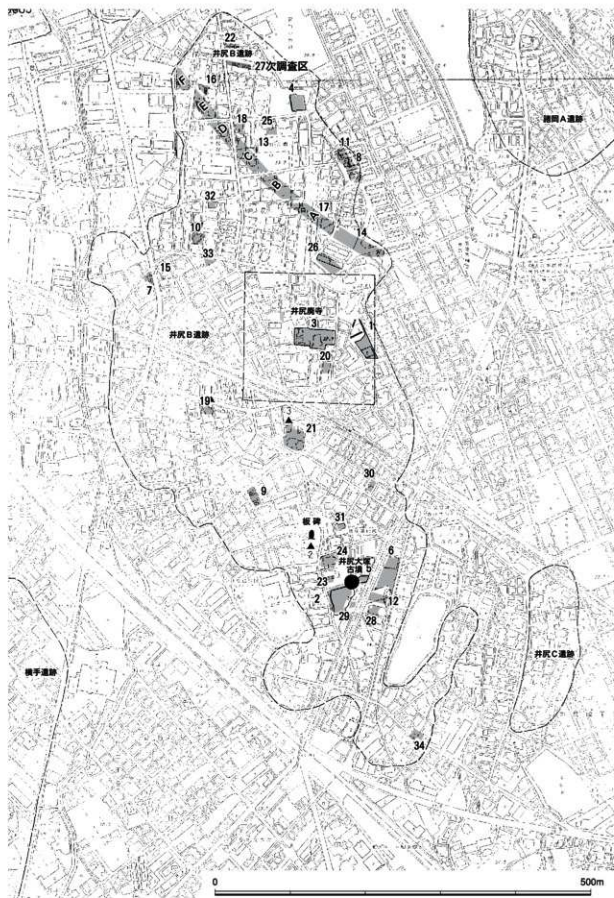


Fig. 2 井尻B遺跡位置図 (1/5,000)

れに先行する中期の壘館墓群が、第16・17・27・34次調査など丘陵の北側で検出されている。

古墳時代になると、5世紀後半には丘陵南側の第2・5次調査で墳径が25mの前方後円墳の可能性のある円墳（井尻B1号墳）が造営され、鉄刀や鉄剣、刀子、ガラス玉のほか朝顔形埴輪や家形埴輪などが出土している。第28次調査区でも、家形埴輪片が出土している。この古墳が「筑前國續風土記拾遺」に記された「大塚」と考えられる。この間途絶した集落域は、6世紀後半～7世紀には掘立柱建物を中心とする集落域が再び展開するが、その在り様は疎らである。

古代になると、7世紀後半～8世紀前半には、丘陵中央部の第1・3・17次調査で百済系単弁瓦を初めとする丸瓦や平瓦が、11次調査では「寺」とへら描きされた須恵器皿が出土しており、方1町の寺院跡「井尻廃寺」の存在が指摘されている。北の那珂、比恵でも老司式の古代瓦を伴う溝などが検



Fig. 3 井尻B遺跡周辺旧地形図 (1/20,000)

出されており、寺院あるいは官衛の存在が想起されている。また、東には大宰府からの官道に沿って高畑鹿寺がある。一方、那珂川を挟んだ左岸には銅製の箸や匙、富寿神寶などが出土した三宅庵寺がある。この3寺は、那珂郡衛の推定地より等間隔並んでおり、平野内には幾つかの古代寺院が建立されていたものと推考される。これ以降、8世紀後半から中世末期まで古代末、中世の遺構はきわめて稀薄になるが、開析谷を隔てた北の五十川遺跡～那珂丘陵に多く見られる。

遺跡名	調査番号	調査年	所在地	調査面積 (㎡)	報告書	遺跡の概要	主な遺物
第1次調査	8124	1981	井尻1丁目111-19	600	111	土壇、溝、水溜状遺構	丸・平瓦
第2次調査	8610	1986	井尻5丁目175-1	900	175	石基礎、弥生～古墳；孤立柱建物、土壇墓、古墳	礎石瓦、石、ナノ形石、円筒埴輪、家形埴輪、ガラス小玉
第3次調査	9201	1992	井尻1丁目2894・29	1,060	411	弥生～古墳；住居跡、井戸跡 古代；住居跡、溝	碧玉勾玉、鉄斧、百濟系卑弁軒丸瓦
第4次調査	9335	1993	井尻1丁目47-1	390	412	弥生前期～古墳前期；住居跡、孤立柱建物、井戸跡、土壇	
第5次調査	9408	1994	井尻5丁目171-9	130	441	古墳；円墳	円筒埴輪、家形埴輪、ガラス小玉、鉄剣、鉄刀
第6次調査	9501	1995	井尻4丁目170、171	800	529	弥生前期～古墳前期；住居跡、孤立柱建物、井戸跡、土壇	小型仿製鏡、銅鏡埴型、ガラス小玉
第7次調査	9520	1995	井尻1丁目385-29	69	年報Vol.10	古代？ビット・土壇	土器
第8次調査	9667	1997	井尻1丁目13番地内	113	571	弥生～古代の遺物包含層	
第9次調査	9745	1997	井尻5丁目36-33	132	678	弥生後期；住居跡	
第10次調査	9758	1997	井尻1丁目27-13	153	678	弥生～古墳；溝 古代；孤立柱建物	百濟系卑弁軒丸瓦
第11次調査	9809	1998	井尻1丁目1番地内	890	644	弥生中期～古墳初期；井戸跡、土壇	銅手鋤型、銅鏡、埋石土製品
第12次調査	9865	1999	井尻4丁目170-19	125	645	弥生後期～古墳初期；住居跡、孤立柱建物、	細石刀核
第13次調査	9953	1999	井尻1丁目755-8	60	年報Vol.14	弥生後期；住居跡 中世；溝	
第14次調査	9958	1999	井尻1丁目13番地内	952	736	弥生；孤立柱建物 古墳；井戸跡	銅鏡埴型
第15次調査	9965	2000	井尻1丁目363-3	36	年報Vol.14	中世；溝	
第16次調査	4	2000	井尻1丁目729-1	132	721	弥生中期；豊楢墓、土壇墓、土壇	
第17次調査	0027-0090	2000	井尻1丁目地内	3,657	787・834・918	弥生後期～古墳前期；住居跡、孤立柱建物、土壇、井戸跡、豊楢墓	小型仿製鏡、小銅鐸、ガラス勾玉・銅刀埴型
第18次調査	28	2000	井尻1丁目757-3	186	年報Vol.15	弥生中期～古墳初期；住居、井戸跡、貯蔵穴、ビット	土器、石鏃、鉄刀子、碧玉、ガラス玉
第19次調査	43	2000	井尻5丁目12-32	133	年報Vol.15	古代？溝	瓦
第20次調査	116	2001	井尻1丁目283-1	69	年報Vol.16		土器
第21次調査	136	2001	井尻5丁目9・29	366	788	弥生；豊楢墓、住居跡、土壇、溝 古代；溝	
第22次調査	133	2001	井尻1丁目735-5	141	923	弥生、奈良、中～近世；孤立柱建物、土壇、溝	
第23次調査	474	2004	井尻5丁目163-9	22	年報Vol.19	ビット	
第24次調査	489	2004	井尻5丁目163-19	66	年報Vol.19	弥生；柱穴 古代；土壇、溝	
第25次調査	613	2006	井尻1丁目754-29	80		弥生前期？；木棺墓 弥生中期；住居	土器
第26次調査	629	2006	井尻1丁目87番1	614	973	中世；水田跡	
第27次調査	641	2006	井尻1丁目783-39	133	1136	弥生後期；孤立柱建物、土壇、豊楢墓、土壇墓	弥生土器
第28次調査	658	2006	井尻4丁目170-12	341		弥生末～古墳初期；住居跡、溝	家形埴輪
第29次調査	668	2006	井尻5丁目175-1	87		弥生；土壇墓 弥生～古墳；溝、土壇、柱穴	土器
第30次調査	734	2007	井尻5丁目143-17	129		弥生後期～古墳初期；住居跡、孤立柱建物、溝と土穴	
第31次調査	765	2007	井尻5丁目160-6	103.5		弥生時代中期～後期	
第32次調査	849	2008	井尻1丁目712番7	98.2		弥生時代中期～後期；惣穴住居、孤立柱建物、土壇、井戸	弥生土器、土師器、須恵系瓦、石鏃、ガラス、鉄器
第33次調査	859	2008	井尻1丁目305番16	37.0		弥生時代、近世；溝、柱穴	土器、陶磁器
第34次調査	924	2009	井尻4丁目815-1、822	485.0	1106	弥生時代中期～後期；豊楢墓、土壇墓、土壇、溝	弥生土器・土師器
第35次調査	938	2009	井尻1丁目764番2	61.0		弥生時代中期～後期、古代；惣穴住居、溝	土器
第36次調査	1112	2011	井尻1丁目728番2	175.0		弥生時代中期～古墳時代前期；溝	土器

Tab. 1 井尻B遺跡調査一覧表

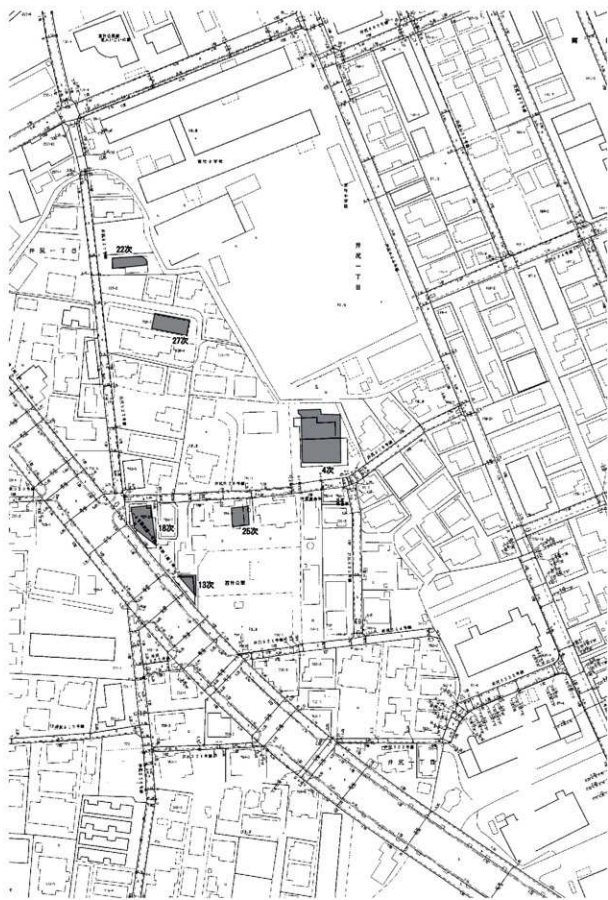


Fig. 4 井尻B遺跡第27次調査区位置図 (1/2,000)

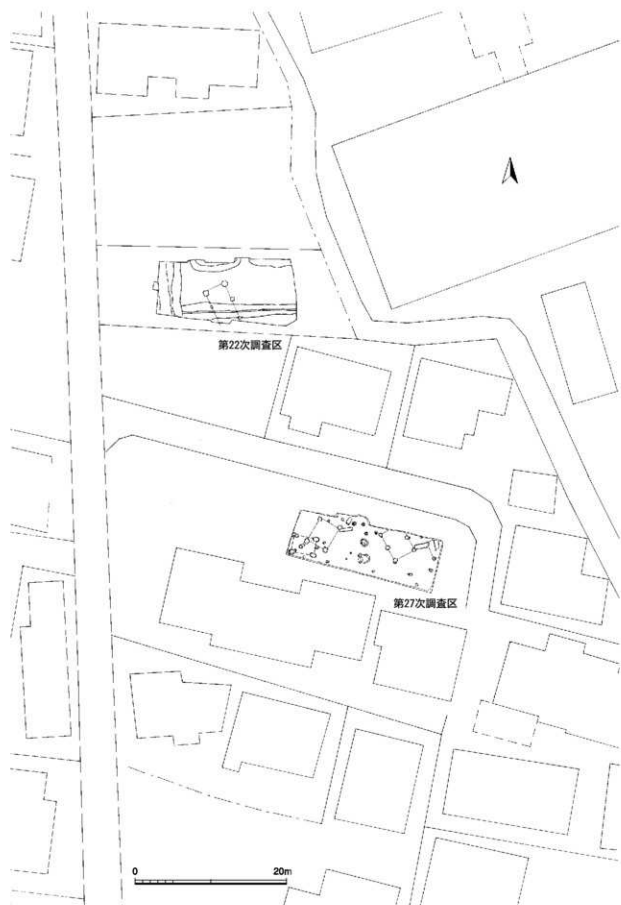


Fig. 5 井尻B遺跡第27次調査区周辺現況図 (1/500)

## II. 調査の記録

### 1. 調査の概要

井尻B遺跡は、福岡平野を北流する那珂川の右岸に沿って連なる春日丘陵が、標高を減じながら那珂・比恵へと続く低平な台地上に立地し、第27次調査区は、この南北に長く延びる井尻台地の最北端に位置している。

試掘調査では、表土下10～15cmでピットが検出されたが、その密度は疎らであった。しかしながら、建築予定の建物に沿って面的に調査範囲を広げると、甕棺墓と土壊墓のほかに掘立柱建物を検出した。近接する第16・17・25次調査区でも同期の甕棺墓や土壊墓と竪穴住居や掘立柱建物検出されており、周辺一帯に弥生期の集落域が広がっていたことが明らかになった。

### 2. 甕棺墓 (ST)

(Fig. 6 ph. 1・4)

甕棺墓は、小児墓が5基 (ST-03・05～07・10) と成人墓2基 (ST-04・11) の7基を検出した。分布的には、細長い調査区の中央部にまとまって分布しているが、これが甕棺墓全体の拡がりとは云えない。また、甕棺墓間の切り合いも1例 (ST-03・11) のみである。

#### 3号甕棺墓 ST-03

(Fig. 9・10 ph. 5・10)

3号甕棺墓は、調査区中央部の11号甕棺墓の埋土上に掘り込まれた中人墓である。甕棺墓は、棺底を残して削平されており、合口式か単口式かは判断し難い。甕棺は、楕円形プランの墓壇に約21°の傾きで埋置され、主軸方位をN-16°-Eにとる。墓壇底と甕棺の間には4～5cmの隙間があり、暗茶褐色土を充填して棺の安定を図っていた。

甕(2)は、底径が11.4cmの中型の甕で、胴部は砲弾形をなそうか。調整は、外面がナデ後にハケ目、内面は押圧ナデで内底面には強い指頭圧痕が残る。胎土は細砂～石英小砂粒と角閃石細片・雲母微細を含み、焼成は良好。色調はくすんだ淡黄褐色。

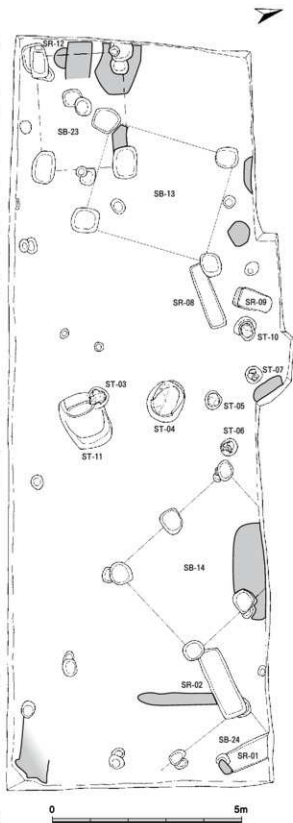


Fig. 6 第27次調査区遺構配置図 (1/100)





Ph. 1 調査区全景 (西から)

## 4号甕棺墓 ST-04 (Fig. 7・8 ph. 2・3)

4号甕棺墓は、調査区のほぼ中央部に位置する単口式成人墓で、すぐ南へ1mの距離には3・11号甕棺墓が、50cm北には5号甕棺墓がある。墓壇は、はじめに甕よりも一回り大きい楕円形プランの竅穴を掘り、その北壁側に奥の浅い斜坑を掘る2段掘りの構造をなしている。甕棺は、この斜坑の上端に口縁部を置いて43°の角度で挿入し、斜坑底に接する胴部下には暗茶～黒茶褐色土を敷いて棺の安定を図っていた。甕棺は、板材で覆蓋をしていたと推考されるが、口縁部下の斜坑面には木蓋痕は観察されなかった。主軸方位はN-41°-Wにとる。

甕(1)は、口径が71.2cm、底径が11cm、器高が102.4cmの大型甕である。口縁部は、逆L字状をなし、丸く整えた外唇は小さく下に擠み出す。対して内唇は凸帯様に擠み出している。胴部は砲弾形をなし、口縁部下には

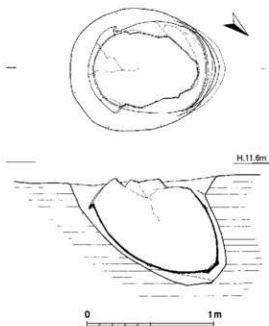


Fig. 7 4号甕棺墓実測図 (1/30)



Ph. 2 4号甕棺墓 (西から)

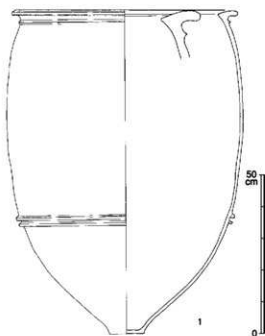


Fig. 8 4号壺棺実測図 (1/12)

1条の三角凸帯が、胴部下半には2条のコ字凸帯が巡っている。調整は、口縁部と凸帯部がヨコナデのほかは丁寧な押圧ナデで、胴部の凸帯上には黒色物の付着痕があり、すす様の黒色顔料が塗布されていた可能性が考えられる。胎土は良質で、微細砂と小～中砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は、ややくすんだ明赤橙色。

#### 5号壺棺墓 ST-05

(Fig. 9・10 ph. 7・10)

5号壺棺墓は、調査区の中央部北側にある小児墓で、1m東には6号壺棺墓が、また1m北には7号壺棺墓が位置している。壺棺は、大半が削平されているが、主軸方位をN-48°-Wにとり、甕の大きさに合わせた斜坑状の墓壇に35°の傾斜で挿入されている。

甕(3)は、底径が8.8cmの甕で、砲弾形の胴部は外面が粗いタテハケ目、内面は押圧ナデ調整。内面の上半には黒色物の付着痕がある。胎土には微細～小砂粒のほかに雲母微細を含む。色調は外面が淡黄緑～淡赤橙色、内面は淡明黄褐色。



Ph. 3 4号壺棺 (縮尺不同)

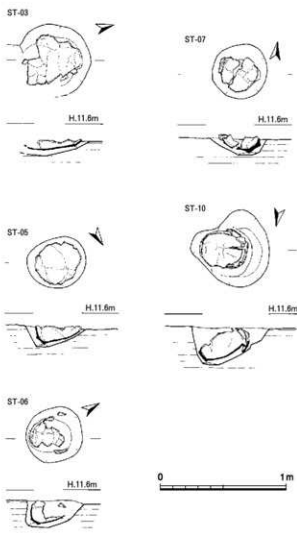


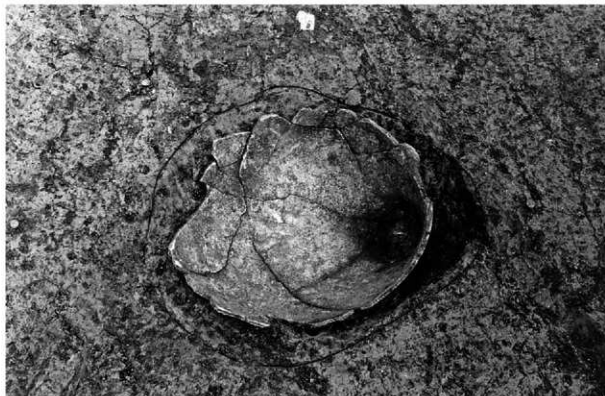
Fig. 9 3・5・6・7・10号壺棺墓実測図 (1/30)



Ph. 4 調査区中央部甕棺墓・土壇墓群（西から）



Ph. 5 3号甕棺墓（西から）



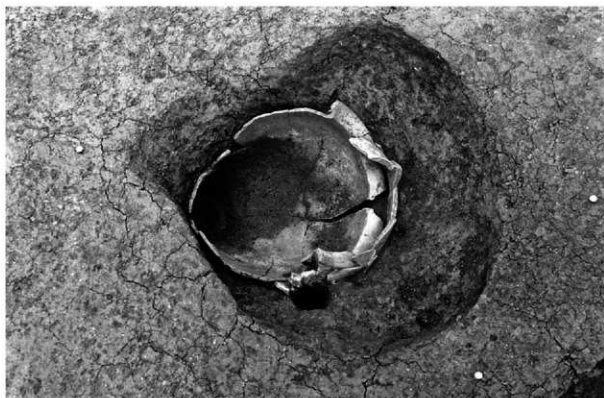
Ph. 6 5号甕棺墓 (南から)



Ph. 7 6号甕棺墓 (東から)



Ph. 8 7号甕棺墓（東から）



Ph. 9 10号甕棺墓（北から）

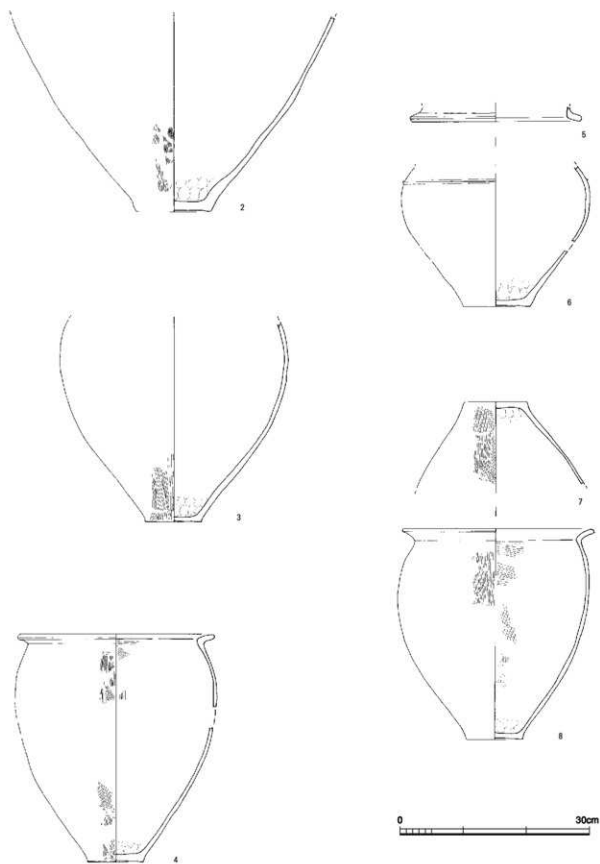
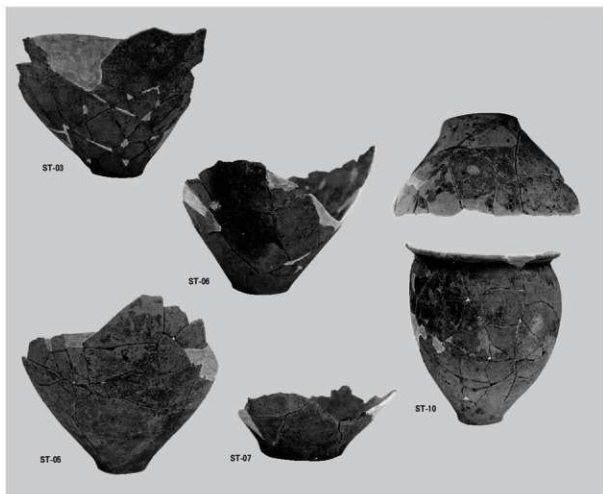


Fig. 10 3·5·6·7·10号墓棺实测图 (1/6)



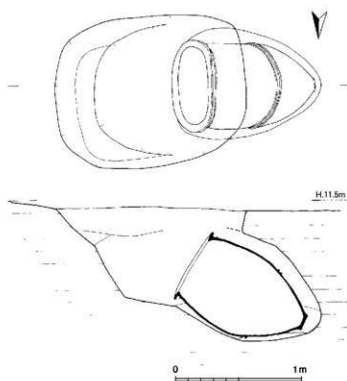
ph. 10 3・5・6・7・10号甕棺 (縮尺不同)

## 6号甕棺墓 ST-06

(Fig. 9・10 ph. 7・10)

6号甕棺墓は、調査区の中央部に広がる甕棺墓群中でもっとも北東端に位置する小児墓で、すぐ西には4・5号甕棺墓がある。全体に消失が著しいが、墓壇ははじめに竖穴を掘り、その壇底にやや浅めの短い斜坑を掘る2段掘りの構造をなしている。甕棺は、この墓壇に約50°の角度で挿入している。棺底と墓壇の間には暗茶褐色土を3~5cm敷き詰めて棺の安定を図っている。主軸方位はN-84°-Eにとる。墓壇の両側壁縁に別個体の口縁部片があり、上甕片の可能性がなくもない。

甕(4)は、口径が31cm、底径が8.9cm。胴部は倒卵形をなし、平底の底部



ph. 11 11号甕棺墓実測図 (1/30)

は浅い上底状をなしている。調整は、口縁部がヨコナデ、外面はハケ目、内面は指頭押圧ナデで上半部には粗いハケ目が残る。胎土は良質で、微細砂～小砂粒を多く含み、色調は、明赤橙色。

#### 7号甕棺墓 ST-07

(Fig. 9・10 ph. 8・10)

7号甕棺墓は、甕棺墓群中の北西端に位置する覆口式小児墓で、南には5号甕棺墓が、また西には10号甕棺墓が隣接している。墓壇は、甕の大きさに合わせた斜坑状の堅穴を掘り、そこに胴部上半を打ち欠いた甕を54°の急角度で挿入した後に甕を覆うように被せている。甕は、削平による消失が著しいが、主軸方位をN-83°-Eにとる。

上甕(5)は、口径が27.2cmの甕で、口縁部は逆L字状に大きく外反する。胎土には微細砂と石英小～中砂粒を多く含むほかに雲母微細も含む。焼成は良好で、色調は明赤橙色。

下甕(6)は、底径が10.6cmの甕である。胴部は、玉葱状の偏球形を呈し、肩部には1条の三角凸帯が巡っている。内外面とも摩滅が著しいが、内面には指頭押圧痕が残っている。胎土は良質で、微細～石英中砂粒を多く含むほかに少量のシャモット様の赤褐色粒を含む。色調は淡赤橙色。



Ph. 11 11号甕棺墓 (南から)



Ph. 12 11号甕棺墓挿入状況 (北から)

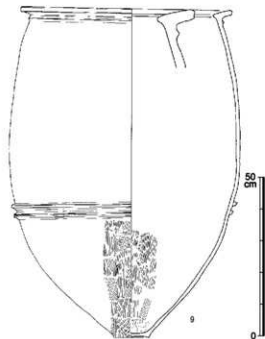


Fig. 12 11号甕棺実測図 (1/12)



ph. 13 11号甕棺 (縮尺不同)



遺構No	台口形式	器種	器底形態	法 器		主軸方位	埋置角	性	備 考
				長さ×短径×深(cm)					
ST-03	単口	甕	楕円形	60×57×14+a		N-16° -E	55° (?)	中人	ST11→ST03
ST-04	単口	甕	楕円形	115×96×88		N-41.3° -W	43°	成人	木蓋
ST-05	単口(?)	甕	楕円形	48×40×12+a		N-48° -W	47.7°	小児	
ST-06	覆口(?)	？+甕	楕円形	45×44×22+a		N-84° -E	50°	小児	
ST-07	覆口	甕+甕	楕円形	43×43×20+a		N-83° -W	54°	小児	下甕口縁打欠き
ST-10	覆口	甕+甕	楕円形	45×60×30+a		N-76.5° -E	54°	小児	上甕口縁打欠き
ST-11	単口	甕	楕円形、2段振り	150×120×112		N-85° -W	27°	成人	木蓋、ST11→ST03

Tab. 2 甕棺墓一覧表

## 10号甕棺墓 ST-10

(Fig. 9・10 ph. 9・10)

10号甕棺墓は、調査区中央部の北縁に位置する覆口式小児墓で、すぐ西には9号土壙墓が、東には7号甕棺墓が隣接している。墓墳は、はじめに45cm×60cmの楕円形の堅穴を掘り、その西壁に斜坑を15cmほど掘り込んだ2段階掘りの構造をなしている。甕棺は、この斜坑の上端に沿って下甕の口縁部を置き、その上から胴部上半を打ち欠いた甕を覆い被せて上甕としている。主軸方位をN-77° -Eにとり、埋置角は40°である。下甕は、棺底下に暗茶褐色土を詰めて安定を図っている。

上甕(7)は、胴部上半を打ち欠いた甕で、底径は9.8cm。底部は平底で、胴部は倒卵形をなそう。調整は、外面がやや粗いハケ目、内面は指頭押圧ナデ。胎土は精良で、微細砂～小砂粒と雲母微細を含む。色調は外面が淡黄褐色、内面は淡黄白色。

下甕(8)は、口径が30.2cm、底径9cm、器高は33.4cmの甕である。端部を丸く納めた口縁部は「く」字状に外反する。胴部は倒卵形をなし、平底の底部は浅い上底状をなす。調整は、口縁部がヨコナデ、外面はやや粗いたテハケ目、内面は押圧ナデ後に粗いたテハケ目、内面は押圧ナデ後に粗いたヨコハケ目。胎土はやや粗く、多くの微細～小砂粒と少量の雲母微細を含む。色調は外面が淡黄褐色、内面はくすんだ淡黄灰色で、外面の上半には煤が付着しており、日常雑器の転用品であろう。

## 11号甕棺墓 ST-11

(Fig. 11・12 ph. 11~13)

11号甕棺墓は、調査区中央部の南端に位置する単口式成人墓で、北壁の埋

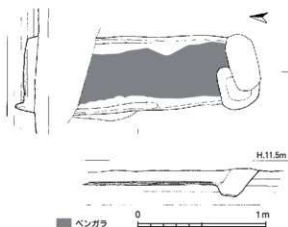


Fig. 13 1号土壙墓実測図(1/30)



Ph. 14 1号土壙墓(東から)

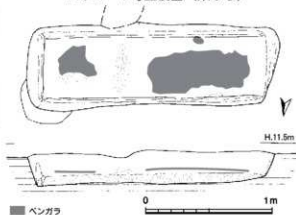


Fig. 14 2号土壙墓実測図(1/30)

土上には3号甕棺墓が掘り込まれている。墓壇は、はじめに120cm×150cmの隅丸方形プランの堅穴を75cm余の深さまで掘っているが、東小口壁は緩やかな段があり、掘り口と考えられる。次に、この堅穴の西壁に60cm奥まで2次墓壇の斜坑を掘っている。甕棺は、この斜坑の上端に甕の口縁部を架けるように27°の角度をもって埋置している。凸部部を中心とする棺底部には灰黒色土を詰めて棺の安定を図っているが、墓壇奥の底部や上面は空洞のままであった。甕棺は、状況的に木蓋で覆蓋したものと考えられるが、明確な木蓋痕は検出できなかった。主軸方位はN-85°-Eにとる。

甕(9)は、口径が66.6cm、底径が12.2cm、器高が103.5~104.3cmの大型甕である。口縁部は逆L字状をなし、平坦に整えた外唇は中央部が浅く凹線状に窪む。一方、小さく摘み出した内唇は、短く平坦に整えている。胴部はやや長胴の砲弾形をなし、口縁部下にはシャープな三角凸帯が1条、胴部下半にはM字様のゴ字凸帯が2条巡っている。調整は、口縁部と凸帯部がヨコナデ、凸帯間は丁寧な押圧ナデ、胴部凸帯下はナデ後に細いハケ目。外面全体と内面の口縁部下には煤様の黒色物が附着しており、全体に黒色顔料が塗布されていたと考えられる。胎土には微細~石英中砂粒を多く含むほかに雲母微細粒とシャモット様の赤褐色粒を含む。色調は黄褐色。

### 3. 土壇墓 (SR)

土壇墓は、5基を検出した。このうち3基 (SR-02・09・12) は木棺墓である。また、土壇墓1基 (SR-09) と2基の木棺墓 (SR-02・08) の3基には、棺内にベンガラが撒かれていた。分布的には、細長い調査区の南西隅に1基、中央部北端に2基と北東隅に2基の3グループに6~8mの距離を置いて分かれている。このうち中央部と北東隅の一群の間には7基の甕棺墓が分布している。

#### 1号土壇墓 SR-01

(Fig. 13 p h. 14)

1号土壇墓は、調査区の北東隅にある土壇墓で、すぐ西には2号木棺墓が位置している。南小口壁は、柱穴や攪乱坑に削平されて消失している。加えて北小口壁は調査



ph. 15 2号土壇墓 (北から)

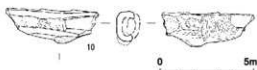


Fig. 15 2号土壇墓出土遺物実測図 (1/2)

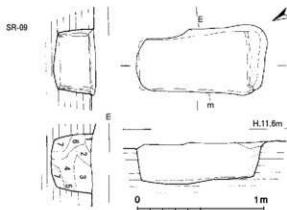
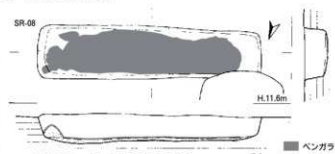


Fig. 16 8・9号土壇墓実測図 (1/30)

- 凡 例
1. 黒褐色土：明黄褐色粘土ブロック混入
  2. 黒褐色土：明黄褐色粘土粒若干混入
  3. 黒褐色土：粘土ブロック混入
  4. 黒褐色土
  5. 黒褐色土：黄褐色粘土粒若干混入
  6. 暗褐色土：黄褐色粘土小ブロック多量
  7. 褐色粘土ブロック土：暗灰色土食

区外に広がっているために全容は明らかでないが、平面形は小口壁長が55cmで側壁長は150～170cmに復原されようか。垂直に立ち上がる壁面は、深さが11cmで主軸方位をN-5°-Wにとる。断面形は箱型をなし、フラットな床面上には、ロームブロックの混入した淡黒色土を1～2cm敷き詰めて棺床を作り、その上面にはベンガラ粉が薄く撒き拡げられていた。側壁下の床面上には、5～6cm幅の溝状の掘り込みがあり、その中央には2～3cm幅で淡灰黒色土が堆積していたことを勘案すると木棺墓の可能性も否定しがたい。覆土中から弥生土器片が出土した。

#### 2号土墳墓 SR-02

(Fig. 14・15 ph. 15)

2号土墳墓は、調査区の北東部にあり、東小口壁は24号建物跡に、西小口壁は14号建物跡の柱穴を切っている。平面形は、側壁長が190～197cm、小口壁長が56～61cmの長方形プランを呈し、主軸方位をN-85°-Eにとる。急峻に立ち上がる壁面は、深さが24～27cmで断面形は逆台形状をなす。フラットな墓壇底には、黄粘土ブロックを6～8cmほど敷き固めて棺床を作り、その上にベンガラをやや厚く撒き拡げていた。この棺床の中央より20cmほど東には、帯状の黄灰色粘土ブロックが棺床を区切るように敷かれていた。また、両側壁と東小口壁下には棺床上に幅が4～5cmの溝状の掘り込みがあり、板材の腐食痕と考えられる。一方、西小口壁下には溝状の掘り込みはないが小口壁との間に黄粘土ブロックが堆積していた。加えて東小口壁下の溝状の掘り込みの交差状況を勘案すると、側壁材を小口材で挟み込んだ組合式木管墓と考えられる。棺の内法は側壁長が170cm、小口壁長が50cmに復原される。遺物は、弥生甕片がわ



ph. 16 8・9号土墳墓、10号甕棺墓（南から）



ph. 17 8号土墳墓（南から）



ph. 18 9号土墳墓（西から）

ずかにした。

10は、鉄製品の残片である。2~3mm厚の鉄錆が楕円状に回り、中空部には木質片が付着している。また、外面には縦方向に皮巻痕のような木質痕が残存している。刀子の茎部か。

#### 8号土墳墓 SR-08 (Fig. 16 ph. 16・17)

8号土墳墓は、調査区中央部の北部にあり、北西隅壁は13号建物跡の柱穴に因って削平されている。平面形は、側壁長が177cm、小口壁長が39~43cmの長方形プランを呈し、N-81°-Eに主軸方位をとる。壁高が23cmの壁面は急峻に立ち上がり、断面形は墳底が浅い窪んだ箱型をなす。墳底上には1~3cmの厚さに黒色土を敷いて棺床を作り、その棺床上に1cm内外の薄さでベンガラを撒いていた。また、東小口壁下には、棺床から10cmほどの高さにまで黒色土を敷き固め、その上もベンガラを撒いていた。あたかも頭位の囲むような感がある。遺物は、弥生壺や甕片がわずかに出土したのみである。

#### 9号土墳墓 SR-09 (Fig. 16 ph. 18)

9号土墳墓は、調査区中央部の北端に位置し、すぐ南には8号土墳墓が、また東には10号甕棺墓が隣接している。平面形は、側壁長が101cm、小口壁長が41~55cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-30.5°-Eにとる。南小口壁の西隅には幅が5cmほどの溝状の扶込みがあり、更に東隅には黒色土が浅く溝状に堆積していた。この2点と小口壁の間には、土墳内の黒~黒褐色の埋土と異なる黄粘土ブロックを含んだ黒色土が硬く堆積していた。このことから小口壁隅の扶込みや溝状の黒色土は側壁材の扶込痕と考えられることから組合式の木棺墓と考えられる。覆土は、黒~黒褐色土の互層で弥生甕小片がわずかに出土した。

#### 12号土墳墓 SR-12 (Fig. 17 ph. 19)

12号土墳墓は、調査区の東南隅にあり、23号建物跡の柱穴の埋土上に掘り込まれている。平面形は、側壁長が83cm、小口壁長が45cmで、壁面は急峻に立ち上がり、深さは45cm。床面は浅い凹レンズ状をなす。西小口壁下には、浅い溝状の扶込みがある。また、側壁の両端には3~5cm幅の黒色土が隅壁に沿って浅く溝状に堆積していた。これは板材の挿入時に発生した扶込痕と推考され、木棺墓の可能性が強く考えられる。覆土は黒褐色土の単一層で、弥生壺と甕の小片がわずかに出土した。

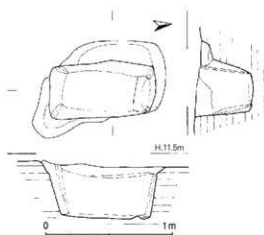


Fig. 17 12号土墳墓実測図 (1/30)



ph. 19 12号土墳墓 (北から)

遺構No	合同形式	墓域形態	法 量		主軸方位	性	備 考
			長軸×短軸×深(cm)	内法法量 長軸×短軸×深(cm)			
SR-01	木棺墓(?)	長方形	160+a×60×10+a	×8+a	N 5°-W	成人	2~3cmの粘床の上にベンガラ散布。
SR-02	木棺墓	長方形	138×62×27	175×56×18	N 45°-E	成人	7~8cmの粘床の上にベンガラ散布。中央部に枕石状の粘土塊
SR-08	土壘墓	長方形	177×43×20		N 41°-E	小児	
SR-09	木棺墓	長方形	111×50×33	88×43×31	N 30.5°-E	成人	2~3cmの粘床の上にベンガラ散布。東小口壁下に枕石(?)
SR-12	木棺墓	長方形	91×44×46	65×32×35	N 40.5°-E	小児	SB-23→SR-12

Tab. 3 土墳墓一覧表

#### 4. 掘立柱建物跡 (SB)

掘立柱建物は、すべてで4棟を検出した。分布的には調査区の東西に分かれるように見て取れるが、13号建物と14号建物の間隔が6m程しかなく、それが直ちに分布的傾向を示すとは言い難い。ただし、13号建物と23号建物が重複しており、少なくとも2ないし3時代に亘って建替えられていた可能性が窺える。

##### 13号建物跡 SB-13 (Fig. 18 ph. 20)

13号建物跡は、調査区の西部に位置する1間×1間の南北棟の建物跡で、北東隅に桁柱は8号土壇墓を切っている。梁行長は280cm、桁行長は340cmで床面積は9.52㎡ある。柱穴の平面形は、50～63cm×60～70cmの方形プランを呈し、深さは30～35cmで、各柱穴には18～25cmの柱痕跡が遺存していた。この柱痕跡を結ぶと建物跡は、桁柱は11～13°西へ、梁行は7～10°南へ歪んだ平行四辺形状をなし、その時の梁行長は2.9m、桁行長は3.25～3.5mになる。覆土は濃茶褐色土で、弥生壺や甕片

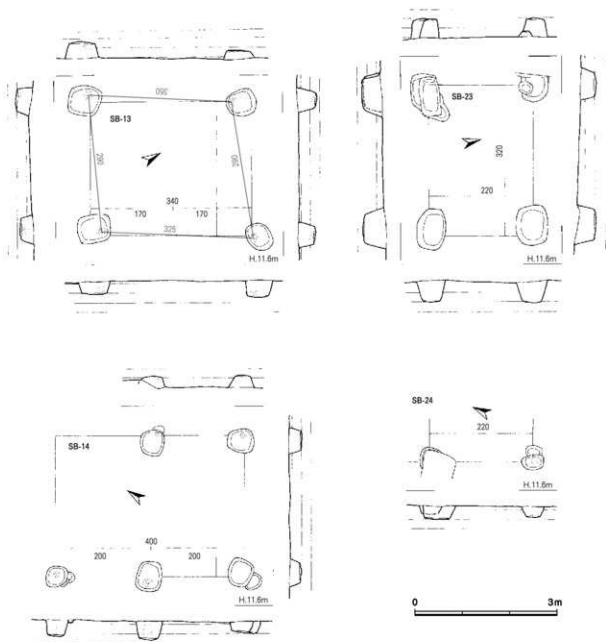


Fig. 18 13・14・23・24号建物跡実測図 (1/80)

がわずかに出土した。

#### 14号建物跡 SB-14

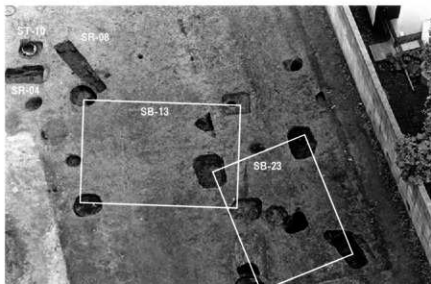
(Fig. 18 ph. 21)

14号建物跡は、調査区の北東部にある1間×2間の南北棟の建物跡で、南東隅の桁柱は2号土墳墓の小口壁を切っている。梁行長は300cm、桁行長は400cmで柱間は東桁側が280cmと220cm、西桁側が200cmの等間で床面積は12㎡ある。柱穴の平面形は、45~60cmの隅丸方形プランを呈し、深さは25~40cmで、直径が15~19cmの柱痕跡が遺存していた。覆土は、濃茶~黒茶褐色土で弥生壘片や鉢片がわずかに出土した。

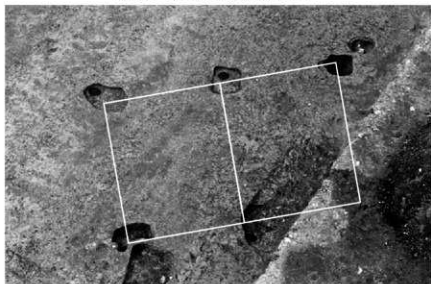
#### 23号建物跡 SB-23

(Fig. 18 ph. 20)

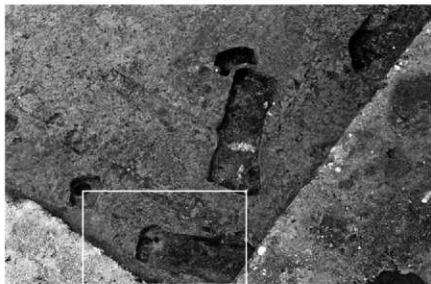
23号建物跡は、調査区の北西隅にある1間×1間の東西棟の建物跡であるが、西あるいは南へ拡がる可能性も否定できない。南西隅柱は12号土墳墓に切られ、北東隅柱が13号建物跡と重複しているが新旧は判断し難い。梁行長は220cm、桁行長は320cmで床面積は7.04㎡である。柱穴の平面形は、55~65cm×75~85cmの長方形プランを呈し、深さは35~50cmを測る。覆土は、暗茶褐色土の単一層で、遺物は出土しなかった。



ph. 20 13・23号建物跡 (西から)



ph. 21 14号建物跡 (東から)



ph. 22 24号建物跡 (東から)

遺構No	規模	桁行全長 (cm)	桁行柱間 (cm)	梁行全長 (cm)	主軸方位	柱筋	床面積 (㎡)	備 考
SB-13	1間×1間	340		300	N-32°-W	南北	9.52	SB-13~SR-08
SB-14	2間×1間	400	300・300	300	N-30°-W	南北	12	SR-02~SB-14
SB-23	1間×1間	330		220	N-78°-W	東西	7.04	SB-23~SR-12
SB-24	1間×1間 (2間)		220					SR-02~SB-24

Tab. 4 掘立柱建物跡一覧表

## 24号建物跡 SB-24

(Fig. 18 ph. 22)

24号建物跡は、調査区の北東隅にある建物跡で、柱穴は2号土壌墓に切られている。東側の柱筋が調査区外に拡がっているため、柱筋や規模は明らかでないが、柱間は220cmで1間×1間あるいは1間×2間の大きさになろう。柱穴の平面形は、30～50cmの長方形プランを呈し、深さは25cmあり、直径が12～14cmの柱痕跡が遺存していた。

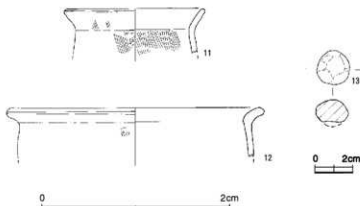


Fig. 19 ビット・遺物包含層出土の遺物実測図 (1/4・1/2)

## 5. その他の遺構と包含層遺物 (SP) (Fig. 19)

調査区では、甕棺墓や掘立柱建物のほかに25基のビットを検出した。覆土的には、黄褐色粘土粒を含んだ黒茶褐色～暗茶褐色土で掘立柱建物の覆土と大差がなく、時期的には同時期のものと考えられる。

11・12は、21号ビットから出土から出土した甕である。11は、口径が15cmの小型甕で、口縁部は緩やかに外反する。調整は、口縁部がヨコナデ。胴部は外面が細かいハケ目、内面は粗いタテハケ目。胎土は良質で、微細～小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。色調は、外面がくすんだ黄褐色、内面は淡明褐色。12は、口径が27.4cm。肥厚した口縁部は、逆L字状に短く外反する。調整は、口縁部がヨコナデ、胴部外面は細かいハケ目。胎土には微細～石英小砂粒と雲母微細を含む。明褐色。

13は、包含層から出土した直径が1.7cmの手捏の土製玉である。胎土には微細～細砂粒と雲母微細を含み、色調は明赤褐色。

## III. 小 結 (Fig. 20)

井尻B遺跡は、春日丘陵から延びる細長い丘陵で、北は浅い開析谷を挟んで五十川遺跡から那珂遺跡群、比恵遺跡群へと続いている。これらの丘陵上には、弥生時代から古墳時代を経て古代へと遺構群が拡がっている。なかでも弥生時代は青銅器製作のひとつの中心地的な拠点集落域が拡がっていたことが明らかになっている。

井尻B遺跡は、南北が1,000m、東西が400mの南北に長い丘陵で、南端部は開析谷が北から湾入して釣り針状をなしている。井尻B遺跡では、これまでに36地点で発掘調査が実施されているが、その調査区域は、都市計画道路御供所井尻1号線沿いの丘陵北部と井尻4～5丁目の交差する幹線道路沿いの丘陵南部の2ヶ所に集中し、丘陵上における遺構の拡がり次第に明らかになりつつある。反面、

丘陵の中央部での調査例は少なく、一種の真空地帯的エリアで、その様相は未だ明らかでない。唯一、第3次調査では、百済系単弁瓦などの瓦が出土し、7世紀後半～8世紀前半の寺院跡いわゆる「井尻廃寺」の存在が想定されている。

第27次調査区は、この南北に長い井尻B遺跡の最北端部に位置し、弥生時代中期後半から後期の墳墓域と集落域を検出した。ここでは弥生時代における集落域の墳墓域の消長について概観し、今後の調査に備えたいと思う。

本調査区で検出した遺構は、前章で記述したように7基の甕棺墓と5基の土墳墓からなる墳墓遺構と4棟の掘立柱建物の集落遺構からなる。このうち墳墓は、甕棺墓と木棺墓を含む土墳墓からなり、概して甕棺墓が先行して造営され、続いて後期に土墳墓が造営されたものと考えられる。これらの土墳墓の棺床上にはベンガラが撒かれている場合が多く、厚葬の傾向が窺える。これらの土墳墓と掘立柱建物との前後関係は、13・14号建物は土墳墓よりも新しいが、23・24号建物は土墳墓より古く、必ずしもどちらか一方が前出するとは云えない。墳墓を神聖視するならば、掘立柱建物が、連続的に継続して建替えられず、一定の時間差を置いて建築されたと考えられよう。

ここで、井尻B遺跡群内に目を転じると、第4・11・13・14・16・17・25・27次調査区で竪穴住居や掘立柱建物が検出されており、丘陵の北東縁に沿った300m×150mの楕円形の範囲に集落域が広がっている。このうち第11次調査区では銅矛の鋳型が、17次調査区では小型仿製鏡や小銅鐸のほか銅戈の鋳型が、また第14次調査区では銅鐸の鋳型が出土しており、青銅器の製作工房があった可能性が窺える。このエリアの墳墓は、第16・25・27次調査区で甕棺墓や土墳墓が検出されており、集落域の北縁に偏って墳墓域が造営されており、集落本体からは隔絶した感がある。次に、丘陵の中央部では第32次調査区で竪穴住居や掘立柱建物、井戸などが検出されているが、位置的には北縁の一群に近い。先述したように丘陵の中央部は調査例が少なく、遺構の拡がりは判然としなが、好立地な丘陵の中央部にも集落域が広がっている可能性は否定できない。

一方、丘陵の南部では、第2・6・9・12・21・28・30次調査区で竪穴住居や掘立柱建物などが検出されており、概ね南北250m、東西が200mの円形のエリアに集落遺構がまとまり、ひとつの集落域を構成していたものと考えられる。更に、ここでも第6次調査区で小型仿製鏡と銅鐸の鋳型が出土しており、北縁の集落域と同様に集落内において青銅器を製作していた可能性が十分に考えられる。これに対して、集落構成員を葬ったであろう墳墓は、第2・21・29・34次調査区で甕棺墓と土墳墓が検出されている。分布的には、集落域の中心を取巻くようにして造営されている。墳墓が検出された4地点のうち、34次調査区を除く3地点は、甕棺墓かあるいは土墳墓のみで構成されている。この事象が何らかの意図をもってなされたものか、あるいは単に調査面積の狭小さに因るものかは即断しかねるが、興味深いように思われる。このように観ると、井尻B遺跡内における弥生時代の集落域は、大きくは、北縁の一群と南縁の一群が対峙するように展開していたと考えられ、其々の集落内において青銅器の製作活動が行なわれていた可能性が窺える。また、集落構成員の墳墓は、集落域を縁辺の特定のエリアに限って造営されていたと考えられる。なお、丘陵の中央部にも集落域が広がっている可能性が十二分にあり、今後の周辺域の調査例の増加をまって井尻台地における遺跡群の消長を再度検討することが必要とならう。



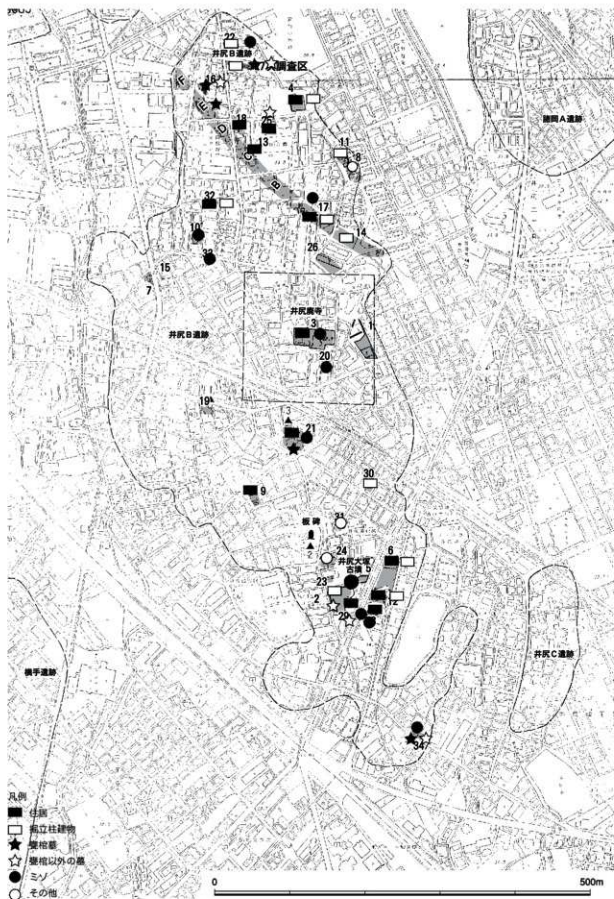


Fig. 20 井尻B遺跡内の弥生時代遺構分布図 (1/5,000)

## 報告書抄録

ふりがな	いじりBいせき20							
書名	井尻B遺跡20							
副書名	－井尻B遺跡第27次調査報告－							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1136集							
編著者名	小林義彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
井尻B遺跡	福岡市南区井尻 1丁目736-3,763-5	40130	90	33°32' "	130°26' "	20060821 ～ 20060902	133	記録 保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
井尻B遺跡 第27次	集落・墓地	弥生時代	張棺墓 土城墓 掘立柱建物跡		弥生土器、鉄製品			

---

## 井尻B遺跡 20

— 井尻B遺跡第27次調査報告 —  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1136集

2012年（平成24年）3月16日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 協文社印刷機  
福岡市西区小戸4-24-5

---